

令和5年度 校内研究反省

小田原市立三の丸小学校

成果

先生方の反省を見ると、

- ・教科の特性に応じた、子どもの知的好奇心と思考を大切にして、単元構想を作り努力ができたか。
(よくできた、できた…90.5%)
- ・実際の授業での「子どもが解決したい問題」は、「事実に基づく問題」「多様な、あるいは異質な考えや立場に出会う、知ることができる問題」の条件を満たしていると考えて設定しましたか。
(よくできた、できた…90.5%)

という結果であった。以上の結果から、単元構想を作成することにより、学習の道筋が子どもの思考に沿ったものとなり、「本時の問題」が子どもにとってより解決したい誠実な問題になったと考える。単元構想づくりは、三の丸小学校の校内研究の大きな柱の一つであり、本校の先生方に定着していると考えてよい。

① 単元構想づくりについての研修会

単元構想づくりは、慣れるまでに時間がかかる。特に、赴任したばかりの先生にとっては、難しく感じるものであると思う。そこで、毎年、年度当初に単元構想づくりの研修会を行っている。本校の校内研究の根幹の部分である単元構想に対する共通理解は必須事項であり、丁寧に行っている。この研修会では、形式だけではなく、何を大切にして単元構想をつくるのか「研究の考え方」を確認する大切な場となっている。この機会があるからこそ、三の丸小学校の研究の考え方を継続することができていると考える。今後も、単元構想づくりについての研修会を行っていきたい。

② みんなでつくる単元構想

今年度も一人一回の研究授業を行った。研究授業は、「全体研・ブロック研・学年研」という3つのカテゴリーに分けて実施した。しかし、学年研の研究授業であっても進んでブロックの先生方に声をかけ、多くの先生方と共に単元構想・授業づくりに取り組むことができた。単元構想づくりに関わる先生が多ければ多いほど、「単元の導入をどうするか」「子どもからこんな反応があるのではないかなどアイデアが出やすく、子どもの思いや願いに沿った単元構想に近づくと考える。

② 子どもの顔を思い浮かべながら語る教師集団

単元構想の検討では、「あの子なら、このクラスの子どもならどう考えるだろう。」と一人ひとりの子ども達の顔を思い浮かべながら、子どもの思考に寄り添った単元構想づくりに取り組むことが先生方の中に定着している。そのため、「本時の学習問題が子どもが解決したい問題になっていた」と感じる先生が多かった。また、子どものつぶやきやノートの記述を丁寧に取り上げ、単元構想を0次案からn次案へ積極的に書き換えていこうとすることができた。その成果として、学習の中で「早くやりたい!」「みんなで考えたい!」と、授業を楽しみにする子どもの姿が見られた。

課題

① 「ひびき合うためのノート指導の工夫」について

これまで2年間計画で、「ノート指導の工夫」を研究の重点項目としてきた。それまでの過程で、もう少しわからない部分を深めたい思いで今年度も「ノート指導」について重点項目として取り組んできた。昨年度作成した「ひびき合うためのノート指導の工夫」として系統的にまとめられたことをもとに、「ノート指導」のノートのとらえ方をもう少し広くとらえ、ICT 機器や思考ツール、ワークシート等などからもひびき合うことができた。来年度は、今年度の実践から教師の出所（よりひびき合うために学びが深まるための手立てや言葉かけ）について研究を深めていくことを確認した。

来年度に行いたいこと

- ① 研究授業で子どもが書いたノートやワークシートを資料として残していく。
- ② 指導案検討でもひびき合うために学びが深まるための手立てや言葉かけについて検討し、留意事項として指導案にも明記する。

最後に、三の丸小学校の先生方は、子どもの思考を丁寧にみとろうとする意識が定着している。研究授業では座席表を作成し、子ども同士の考えをどのようにひびき合わせていこうか、どの子の意見を取り上げようかなど、話し合いの流れを具体的に構想することが多い。だからこそ、子どもたちの話し合いに教師が介入したくなり、結果として教師がしゃべりすぎてしまうことがある。子どもの反応を待ち、少し離れたところで見守るような教師の構えも身につけていきたい。そのためには、考えのズレに気付かせたり、考えを深めたりするための「問い返し」を教師が用意しておく必要がある。さらに、高学年では、それぞれの考えの違いやズレに子どもたち自身が気づき、「でもさ～」と子どもたち自身が仲間に問いかけることができる力を育てていきたい。